

「蒼紫野の森」と「悠久の山」について

今日は、現校歌にも旧校歌にも歌われる「蒼紫野の森、蒼紫の森」、「悠久の山、悠久山」の名称の由来等についてお話しします。

まずは「悠久山」という名称の由来についてです。中国の古典に四書五経という儒教の經典がありますが、皆さん承知していますか？四書は『論語』『孟子』『大学』『中庸』の四つで、五経は、時代によって若干入れ替えがあるようですが、普通は『詩経』『易経』『書経』『春秋』『礼記』の五つを挙げます。海拔約100mの小高い丘の一帯に付けられた「悠久山」という名称は、四書の一つである『中庸』の「博厚（はくこう）は地に配し、高明は天に配し、悠久は窮（かぎ）りなし」という一節に由来しています。『中庸』のこの一節から、「悠久山」と命名した人物は、江戸時代にこの長岡一帯を治めていた長岡藩第9代藩主である牧野忠精（ただきよ）公です。忠精（ただきよ）公は、長岡藩主の他にも京都所司代や老中など、江戸幕府の要職も務めました。譜代大名であった牧野氏は、江戸初期の1618年から幕末までの250年間に渡り長岡藩主の座にありました。

次に「蒼紫野の森、蒼紫の森」についてです。現在、悠久山公園の一角に長岡藩歴代の藩主を祀っている「蒼紫神社」がありますが、皆さんお参りしたことがありますか？社殿は、徳川家康公を祀る日光東照宮の権現造（ごんげんづくり）という建築様式を模した素晴らしいのですが、実は、蒼紫神社は最初から今の悠久山に建てられたわけではありません。蒼紫神社の基となる社は、今の長岡駅一帯にあった長岡城の一角に創建されました。いわゆる江戸幕府8代将軍の徳川吉宗による「享保改革」の時期であり、1722年にこの社を城中に建てたのは、長岡藩第4代藩主の牧野忠寿（ただかず）公です。当初、社には、英邁の誉れが高かった長岡藩第3代藩主の牧野忠辰（ただとき）公と大国主神（おおくにぬしのみこと）の子である八重事代主命（やえことしろぬしのみこと）という神様がお祀りされました。

その後時間が流れ、およそ50年後の1771年に「悠久山」の命名者として先ほど紹介した長岡藩第9代藩主の牧野忠精（ただきよ）公の時、長岡城中の社でお祀りしていた3代藩主忠辰（ただとき）公に対して、京都から「蒼紫大明神」の称号が贈られたことから、忠精（ただきよ）公は新たに今の悠久山の山の中に社殿を造営しました。これが今の「蒼紫神社」なのです。

要約すると、「長岡藩のお殿様が今の悠久山に蒼紫神社を建てた。その際に、神社を含む小高い丘の一帯を、中国の古典『中庸』の一節から「悠久山」と名付けた」、「蒼紫野の森と悠久の山は、ほぼ同じもの」ということを教養として覚えておきましょう。少し難しい話だったかもしれません、こうした事実を知った上で校歌を歌えば、自分たちの校歌に一層愛着が沸いてくると思います。